

3年生の実績データを活用し 新課程での合格ストーリーを描く

時期の特徴

3年生の受験結果が出るこの時期、全ての生徒の進路が決まるまで受験指導や進路指導を丁寧に行いつつ、次年度以降の指導に生かせるリアルなデータが収集できる。

指導のポイント

再現答案や受験直後の生徒の生の声から合否の要因を分析して、自校の指導の強みと弱点を共有した上で、新課程入試で自校の強みを生かす指導の流れを構想する。

※このコーナーは、高校の先生方との検討会を経て制作しております。

目的別データ活用

1 再現答案で 自校の合格者像を リアルに伝える

……→ 図1

◎先輩の体験談などは生徒にとって説得力を持つ指導ツールになるが、中でも合格者の再現答案は市販問題集の模範答案以上に生々しく入試の緊張感を伝える良い材料となる。学校全体の財産を蓄積する意味でも、再現答案の作成を出来るだけ多くの生徒に依頼したい。出題された問題、自分が本番で書いた答えと、自分の予想得点率を記入してもらおう。記入時点で自分の解答が誤っていることに気付いても、入試本番に書いた答えをそのまま書かせる。答案から合否の分岐点を読み取ることが出来れば、生徒はもちろん教師にとっても有益な資料となる。

2 粘り勝てた道のりを 後輩に示す資料を 校内固有財産とする

……→ 図2

◎合格のポイントは高校生活のどこにあったのか、受験生自身が振り返り、生の声で後輩に伝えるシートにはインパクトがある。模試の判定がA、B判定で合格した生徒の振り返りからは「どのような高校生活を送れば好判定が得られるのか」を、C、D、E判定で合格した生徒からは、「最後の巻き返しのカギは何か」を学ばせたい。図2を各クラスで生徒に閲覧させ、今後の学習や生活に取り入れたい点を整理させた上で、面談で具体的取り組みを確認する。また、次年度に各学年で担任を務める教師にとっては「自校の生徒の強みや弱点」を知るヒントになる。

対生徒 への データ

受験直後の3年生に協力を求め、
合格のポイントを次年度へ引き継ぐ

データを用いた指導の流れ

STEP 1

◎受験が終了した3年生に再現答案と、3年間の振り返りシートの作成を依頼する (図1、2)

STEP 2

◎再現答案は、主に次年度の3年生と学年団のための資料として引き継ぐ

STEP 3

◎振り返りシートは、1、2年生にも閲覧させ、合格までの道のりを長い視野で見通すよう促す

STEP 4

◎振り返りシートは、どのようなことが合格の要因になったのかを生徒に分析させ、面談などで具体的な行動へつなげさせる

図1 3年生が作成する再現答案



大学・学部・学科名 / A大学 理学部数学科 (前期)		教科名 / 数学
大問1	$a^2 - a = a(a-1)$ a は奇数より $a-1$ は偶数となる また、 a と $a-1$ は互いに素であり、	予想得点率 100% 50 0
大問2	$\triangle ABC$ において余弦定理を用いると $AC = 5^2 + 4^2 - 2 \cdot 5 \cdot 4 \cos 120^\circ$ ここで $\cos 120^\circ = -\frac{1}{2}$ より、	予想得点率 100% 50 0
個別学力試験 教科別得点率		センター試験得点率(合計)
数学(70%) 理科(45%) 英語(60%)		(70%)
■入試を終えての感想 ほぼ例年通りの出題。予想は60%にあと少しだった。		

図2 合格のキギを考えるための振り返りシート



合格大	B 大学 法 学部 法律 学科			
最後の模試の判定	模試名(10月進研模試) 判定(D)			
センター試験得点率	国語(73%) 地歴(70%) 公民(68%) 数学(56%) 理科(61%) 英語(76%)			
個別学力試験得点率	国語(55%) 地歴(60%) 数学(55%) 理科(なし) 英語(65%)			
合格の要因 (やっておいてよかったこと)		学習面	生活面	進路選択面
	1年	定期考査の見直し	部活がバシだった	未定のまま
	2年	本気で授業を覚悟	キャンプなどで	志望校に決めた
	3年	模試の見直し	インターハイ出場後	判定は厳しいが
反省点 (やっておけばよかったこと)		学習面	生活面	進路選択面
	1年	進度が速く、時間が	部活中心でバタバタ	もっと早く大学調性を



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ (高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス (プラスαの指導)

「後輩のために」を学校文化として根付かせる

不合格となった生徒に再現答案や不合格体験記の作成を依頼する学校も存在する。志望大合格がかなわなかった3年生が後輩のために自由登校期間や卒業式後に学校に行き、自分の体験を綴るのは、自身もそうした学校文化の中で育ててもらった自覚があるからだ。入試対策の資料としてだけでなく、学校の求心力を高めるものとして継続的に取り組みたい。

数年を掛けて大学別答案ノートを作成

志望者が多い大学は、「〇〇大再現答案ノート」として蓄積する。これを4月からいつでも学級で見られるようにしておけば、志望大の合格に向け、何をどうしていけばよいか入試科目別にイメージできる。なお、生徒が書いた答案をそのまま紹介するか、教師が朱筆を加えた上で紹介するかによって、ノート活用の際の生徒への声掛けも変わってくる。

合格最低点を示すことで心理的ハードルを下げる

合格者平均点と最低点のどちらを意識するかで、合格へのハードルの高さは大きく変わる。再現答案で3年生に予想得点率を記入してもらい、また志望大の合格者度数分布を担当が紹介することで、高得点を収めていなくても合格している先輩の存在を生徒は知るだろう。入試を過度におそれずに、1歩1歩計画的に合格に近付くような意識を持たせたい。

目的別データ活用

1 自校の生徒の振り返りから指導の強みと弱点を総括

……→ 図3

◎収集した再現答案や振り返りシート、更に各種データは、生徒向けに活用できることはもちろんだが、これを教師が分析することで、生徒の実情を詳細に把握でき、次年度以降の強化ポイントが見えてくる。年度末の3学年団の学年会議では、3年間の模試推移や校内で実施した各種調査、そして生徒が作成した再現答案や振り返りシートを基に、自校の指導の強み、弱点を教科ごとに洗い出す。新しい1学年団にとっては、新課程生の学力特性や新課程入試で求められる力と照らし合わせることで、より自校の状況に合った3年間の指導計画を立案するためのよりどころになる。

2 模試の判定別に必要な指導を分析し、3年間の指導を描く

……→ 図3

◎高い目標を諦めない生徒が増えるほど、「D、E判定から巻き返せる」「合格最低点に滑り込める」生徒を育てる指導力が必要になる。最後まで諦めずに、学力も向上するのはどのような生徒か、自校の中で必要条件を吟味することにより、その指導の糸口が見えてくる。D、E判定から巻き返した生徒の生活データや再現答案を材料に、学年団でブレインストーミングなどを行い、合格できる生徒像を練り上げる。そうして求める生徒像とそうした生徒を増やすための指導を言語化しながら、3年間の合格ストーリーを肉付けしていきたい。

対教師へのデータ

3年生の振り返りを踏まえて 新課程での合格ストーリーを設計する

データ活用の流れ

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
◎受験時の再現答案、これまでの学習の様子などから、学習面、生活面での合格のポイントを分析・整理する(図3)	◎併せて、中学校で新課程を経てきた新入生の特徴、新課程入試で求められる力などを整理する(図3)	◎特に、3年生後半から大きく巻き返して合格した生徒について、その特徴や必要な指導を学年団で検討する(図3)	◎STEP1~3の分析結果と自校の指導シラバスを踏まえ、次年度の1学年団が3年間の指導の流れをイメージし、共有する(図3)

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！ 右のウェブサイトをご覧ください。

- 2006年4月号「入試結果データの見せ方」
- 2008年4月号「1年生を高校生にする意識付け」
- 2010年2月号「次年度につなげる総括・引き継ぎと3年生からのデータ収集」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>

生きたデータの徹底活用 クリック!

HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→
生徒指導・進路指導ツール集をご覧ください

加工可能な資料が
ダウンロードできます!

生徒指導・
進路指導ツール集

ウェブサイトから
ダウンロード!

●模試結果、再現答案から見える自校の指導の強み、弱点

国語	・強み ・弱点
数学	・強み ・弱点
英語	・強み ・弱点

●合格した生徒の像については、「提出物をきちんと出す」「遅刻がない」「学校行事にも熱心である」「センター試験前でも授業に出ている」など、成績だけでなく行動面についても詳細に言語化する。このことが次の学年団にとって「当たり前の指導を教師全員が徹底する」ためのよりどころになる。

●合格した生徒の特徴／日々の学習（自宅学習、課題提出）、学力（評定、模試）、学校生活（生徒会活動、部活動）などより

●新課程新入生の特徴予測と、新課程入試で求められそうな力

国語	・強み ・弱点 ・新課程入試で求められそうな力
数学	・強み ・弱点 ・新課程入試で求められそうな力
英語	・強み ・弱点 ・新課程入試で求められそうな力

●新課程では、どの教科でも言語活動が重視され、さらに、新しい分野が加わった教科もある。このような新課程の狙いや新たな分野への対応を指導に具体的に組み込んでいくことが必要であり、シートに言語化することは、その準備の確認にもなる。

●第1志望合格者を増やす手立て（12年度結果より 判定値は〇〇模試）

A判定	B判定	C判定	D判定	E判定
24人合格/28人中	42人合格/56人中	41人合格/80人中	31人合格/104人中	22人合格/132人中
この層の合格者を増やすために本校が注力すべき指導		この層の合格者を増やすために本校が注力すべき指導		この層の合格者を増やすために本校が注力すべき指導

●新課程1期生として、各学年で最優先する指導軸

	1年生	2年生
学習		
生活		
進路指導		

●模試判定をさらに吟味していく姿勢を学年団で共有するため、「第1志望合格者を増やす手立て」も大いに語り合いたい。判定が良いのに不合格となった生徒がいる場合、教師の入試直前のケアは十分だったか、またE判定の上位者に対して「合格まで何点必要か」を具体的に示したかなどを検証したい。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け） > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

模試判定と合否結果のズレにこだわる

模試判定で良好な結果を出していても不合格となる生徒もいれば、最後まで判定はふるわなかったが見事に合格を勝ち取る生徒もいる。そのような判定と結果のずれを「運」で片付けることなく、なぜそうした結果になったのか、受験指導の内容やプロセスを分析したい。それにより、次年度以降、より精度の高い教科指導とメンタルケアが可能になる。

模試判定の捉え方を学年団で再確認する

模試判定は受験において1つの大きな指標だが、判定値を一面的に捉えないようにすべきだ。10月の記述とセンター模試のドッキング判定の場合、10月の記述の結果が悪ければ、決して総合判定で良い結果は出ない。また、同じ「C」判定であっても、度数分布上の開きは大きい。「C判定の生徒」とまとめずに、学力状況と合格を可能にした要素を丁寧に見たい。

不合格の要因を分析し1年後の再挑戦に生かす

不合格となり、浪人が決まった生徒に対しては、何が足りなかったから不合格だったのかを分析し、1年後の再挑戦のために生徒に伝える必要がある。同じような難易度の大学でも、出題傾向や配点はその生徒と合っていなかった場合もある。学びたい学問や就きたい職業など将来の目標を貫きながら、合格の可能性を高められる方針を最後に示したい。